
星魂(ほしたま)

炎翼龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほしたま
星魂

【Nコード】

N3976V

【作者名】

炎翼龍

【あらすじ】

ポップスターを自分の物にしようとした者・・・マルクを、宇宙空間での激しい戦いののち、倒したカービィは、自分の住む星、ポップスターへと戻って行こうとした。しかし、その途中、ブラックホールに飲み込まれて辿り着いた先は・・・えっ!? 異世界! ?

最初に

えー、思い付きで始めてしまったこの小説。

原作名の通り、星のカービィと、銀魂のクロスオーバーです。

カービィは喋ります。そして、やる時はやります。

これのカービィは、「星のカービィ スーパーデラックス」の、「銀河に願いを」の後のカービィです。

あと、これは勝手なオリジナル設定ですが、カービィはこの「銀河に願いを」の冒険の前は、「星のカービィ64」の冒険をした。という事になっています。

「銀河に願いを」で、コピーの元DXを手に入れているので、スーパーデラックスに出てくるコピー能力は、基本皆使えます。

「そんなカービィは嫌だ!!」という方は、今すぐ戻って下さい。

それと作者は、銀魂メンバーの口調がちゃんと出来ているかどうか
が異常に心配です。

その辺を配慮していただけると、大変有り難いです。

では、次のプロローグから始まるので、どうぞ。

プロローグ（前書き）

ノリで始めてしまったこの小説・・・不安だらけですが、なんとか頑張って行こうと思います。

では、プロローグ、どうぞ！！

プロローグ

「・・・はあ・・・はあ・・・終わった・・・」

そう、息を切らしながら言うのは、星の戦士、カービィ。

「・・・マルク・・・」

彼は戦った。自分の暮らす、大好きな皆が暮らす・・・自分の大好きな星・・・ポップスターを護るために。そして勝利した・・・しかし、胸には、色々と残る物があった・・・

「・・・どうして・・・君は・・・皆と一緒に楽しく暮らす事は・・・出来なかったの・・・？」

ただただ広がる宇宙を見上げ、彼は呟いた・・・

「・・・ん？」

彼は気付いた。自分に、飛んで近付いてくる黄色い星に。

「・・・ワープスター・・・戻ろっか？」

彼は、そう言いながら、ワープスターに乗り込む。ワープスターは、カービィを乗せると、カービィが住む星、ポップスターへと一直線に飛んでいった・・・

・・・30分後・・・

「あれえ!?!うそお!?!」

カービィは、大変な事になっていた。

「うわわわわ!!ワープスター!!頑張ってえええ!!」

ワープスターは、自分を引っ張る重力から必死に逃げる。

「なんでこんな所にブラックホールがああああ!?!」

そう。カービィは、ブラックホールに吸い込まれそうになっていた。

「ええええ!?!なんでええええ!?!うそおお!?!」

未だに現実を受け入れられず、やたら混乱するカービィ。

「これはまずいイイイイ!!ほんとにイイイイ!!!!」

物凄く踏ん張るカービィ。だが、カービィがどんなに踏ん張ってワープスターに掴まって、ワープスターが重力に負けては意味が無い。実際、ワープスターは重力に負けつつある。

「あれええええ!?!なんで負けてんの!?!お願いだから!!一生の

お願いだから頑張ってよおおお!!!!」

と、いうカービィの叫びも虚しく、どんどんワープスターは吸い込まれていく。無論、それに乗っているカービィも吸い込まれている。

「えっ!?! 嘘っ!?! 僕死ぬの!?! えっ!?! 僕一応主人公なんだけど!?! えっ!?! こんな所で死ぬの!?!」

心無しか、ワープスターも疲れているように見える。

「うわああああ!!!! ほんとに死ぬウウウ!!!! 誰か助けてええええ!!!!!!!!」

が、しかし、カービィの叫びも虚しく、カービィとワープスターはブラックホールに吸い込まれていった・・・

「あ、銀ちゃん、流れ星アル。キャッホウ!! 何願うか迷うアル!!」

と、チャイナ服の少女が、窓の外を見ながらそう言う。ここは、とある場所にある建物の二階・・・とか隠さなくても分かるよね。

「ちょっと、お前ら聞いてんのか？流れ星って言ってるアル。」

と、頭の左右をお団子にしているチャイナ娘・・・神楽が若干怒った様子で言う。

「ああ、ごめんごめん神楽ちゃん。で？流れ星は？」

「もう行ってしまったアル。でも今から願い事しても叶うかもしれないネ。」

と、言うと、

「あんま流れ星なんかアテにすんじゃねえぞ？そんなもん基本叶わねーんだよ。期待させといて終わりなんだよ。つたく・・・どうか天パでは無くサラサラヘアーになりますように。」

「銀さん。言動が矛盾してます。」

散々に言っておいて、結局窓の外を見ながらお願いしている銀時を見て、すかさず突っ込むしんぷ・・・眼鏡。

「オiiiiiiiiiiii！なんで言い直したんだよ！！もういいんだよ眼鏡ネタはあ！！読者ももう飽きてんだよ！！」

と、なんか新八が言っている。まあそんなこんなで、万事屋は今日も平和・・・ただ、いつの間にか、この世界に別世界の者が紛れ込んでる事など知らない：

プロローグ（後書き）

万事屋メンバーの口調がしっかり出来ているか不安です…

第一訓 「お金に執着するとなんだかんだでろくな事にならない」(前書き)

お待たせしました。(こんな小説を待つてゐる方はいないと思います
が・・・)

では第一訓、どうぞ！

第一訓 「お金に執着するとなんだかんだでろくな事にならない」

『~~~~~という訳で、昨晚落ちたと思われる隕石は・・・』

「銀さん、隕石ですって。昨日の流れ星ですかね？」

万事屋に一つある、貧乏臭いテレビ。そこから流れたら放送に、反応する新八。

「あん？流れ星ィ？」

「銀ちゃん！すごいアル！見に行ってみるアルよ！」

と、興奮する神楽。

「あゝ、行ってらっしゃい。」

と、椅子に座りながら、かなりだるそうに手をひらひらさせながら
そう言う銀時。

「何言ってるアルか！銀ちゃん達も行くアル！」

「あゝ？いいんだよ、メンドくせーよ。何がメンドくさいって・・・
・あの、アレだよ。あゝ、例えるのもメンドくせーよ。」

「どんだけめんどくさいんですか……」

心底面倒臭そうに言う銀時に、突っ込む新八。

「大体お前、そんなの見に行つてなんの得があんだよ。金が手に入んのか？ そんなもん無いんだよ。期待させといて終わりなんだよ。」

「銀さん。二話連続で同じ事言ってます。」

「いいんだよ。前はプロローグだったから話数に入んねーんだよ。」

「うわ……滅茶苦茶な事言ってるよこの人……」

と、呆れる新八。

「まゝアレだ。そういう訳だから隕石は勝手に見に行つて……」

『ええっ！？ そんなにするんですか！？』

『まあそうですね。私達にとってはあれはかなりの価値があると思われます。』

そうテレビから聞こえてくると、突然静かになる銀時。

『えー、このように、昨晚落ちた隕石は、研究者の間では大変高額でやり取りされるんじゃないかと……』

「……」

銀時は黙ってテレビを見続ける。

「「隕石採掘じゃあああああ!!!!!!」」

と、ずんずん歩きながら、物凄く険しい表情で言う銀時、そして、
神楽。

「……何故こんな事になってしまったんだろう……」

と、額に手をつき、呆れる新八。別に隕石を見に行くのが嫌な訳では無い。むしろ、興味はある。が、何故か「採掘」になっている所に新八は呆れていた。

「いいかお前らア!!これは遊びじゃねえ、仕事だ!!なんとしても、この山に落ちた隕石を、我が万事屋の物としイイ!!高く売り付ける!!」

「ラジャー!!!!!!」

三人は、隕石が落ちたと言われる山に来ていた。わりと近場だったので、歩きでもそう掛からなかった。

「いいかお前らア!! 隕石らしき物を見付けたら、即刻俺に伝えろ!!」

「ラジャー!!」

再び元気良く返事をする神楽。眼鏡は・・・まあいいか。

「オiiiiiiii!!!! まあいいかってなんだアアア!!!!」

そんなこんなで、先に進んで行く万事屋であった・・・

30分後・・・

「ん・・・? あれ? 銀さん・・・」

「なんだ!? 新八二等兵!!」

「いや、誰ですかそれ・・・二等兵の意味分かってて言ってるんですか?・・・まあいいや、銀さん、あそこになんかボールが落ちてるんですけど・・・」

新八が指差した先には、なんかピンク色のボールが転がっていた。

「ボールウ？新八君、今我々が探してるのは何だね？」

銀時がなんかこう・・・憎たらしい感じの表情でそう言う。

「なんですかそのキャラ・・・果てしなくウザインですけど・・・
・隕石を探してるんでしょう？」

「その通りだ新八君。今我々が探しているのは隕石・・・ボール
なんかを気にしている場合では・・・無い!!」

「そうだぞ新八！あんま調子乗んじゃねえぞ新八ィ!! だからオマ
エは新一じゃ無くて新八アル。」

「うるせー!!! 新八の何が悪いんだよ!!!!!! 謝れ!!!!!! 全国
の新八さんに謝れ!!!!!!」

と、物凄い形相で言う新八。

「ごめんアル。ここの新八以外の新八ィ。」

「僕にも謝れよ!!!!!!」

神楽は、ここの新八にはまったく謝らなかった。それで正解だ。

「オィィィィィ!! オマエはちよいちよい入ってくんなアアアア
!!!!!! なんだ正解って!!! ぶっ飛ばされてーのか!!!!!!」

「うるせーよ新八。だから誰と喋ってんだよ。」

と、やっぱり引いた目で言う銀時。

「いや、なんか天からの声が……」

と、新八が返す。病院行った方がいいんじゃないか？コイツ。

「それにしても、これは何アルか？」

そう言って神楽は、ピンク色のボールを摘まみ上げる。

「「……」」

神楽と、ボールについてる顔らしき物が、向き合う。（と言っても、ボールの目らしき部分は閉じている。）

「うわっ！これ顔ついてるアルよ！！」

そう言いながら、そのボールをポイっと捨てる。

「……っていうか、あれってもしかして天人あまんどじゃ無いですか？」

「天才オ？オイオイ、なんかめんどくせーのが落ちてやがんな。」

そう言うと、銀時と新八は、ボール……っていうか、その天人と思われし者に近付く。

「……あれ？この子……怪我してますよ？しかも結構な量の。」

新八が見てみると、その者は、身体中に怪我をしていた。

「銀ちゃん、帰って治療してあげるアル。」

と、言う神楽。なんだかんだで、根は優しい所もあるのだ。

「……ったく、しょうがねえな……」

銀時も、嫌そうにしながらも放っておけないようだ。その後銀時達は、一旦隕石けんがk・採掘はやめ、この天人を連れ帰る事にした。持ち運びには、軽かったので困らなかった。っていうか重くても、宇宙最強の戦闘民族、『夜兎族』の神楽がいるので、持ち運びに困る事は無い。何故なら、スンゲェ力持ちだからだ。スンゲェ力持ちだからだ。大事な事だから二回言った。

く万事屋く

「新八ィ、様子は？」

あの天人は、和室に一応寝かせてある。小さいので必要無い気がし

たが、一応蒲団も用意した。

「あ、銀さん。まだ気絶してますよ……何があったんでしょうか……」

「さあな。まっ、俺はジャンプ読んでっから。そのまま見とけよ。」

そう言うと、銀時はいつも自分が座っている、椅子の所へと戻っていった。

「……はぁ……相変わらず責任感の無い人だな……」

とか新八が、愚痴を溢していると……

「……ん……?」

天人が、目を開ける。

「あ、目が覚めたみたいだ。」

新八が、顔を覗かせる。すると天人は……

「……眼鏡……?」

と、呟いた。

「オiiiiiiii!!!!!!なんでだアアアアア!!!!!!なんで見
ず知らずの奴までに眼鏡呼ばわりされなくちゃなんねえんだアア
ア!!!!!!」

と、大声で叫ぶ新八。

「ちょっ、うるさい……え？誰……？」

と、その天人は尋ねる。

「……ふう……君が山で倒れてたから助けたんだよ。」

と、答える新八。

「倒れてた……僕は……確か、ブラックホールに飲み込まれて……」

「え？なに言ってるの？」

突然意味の分からない事を言い始めた天人に、疑問の表情を浮かべる新八。と、その時、

「うるせーぞ新八ィ、起きたのか？」

銀時がやって来た。神楽もだ。

「大丈夫アルか？」

「うん。とりあえず大丈夫みたいだけど……」

と、その時、

『ぐうううう……』

「あ、お腹空いた。」

と、天人が言う。

「はあ？ んだよ、飯出せてかあ？ …… はあ …… しょうがねえな ……」

と、銀時は、かなり嫌そうに言う。

「ほらよ。」

居間で、その天人に出されたのは、一杯のご飯。

「……これだけ？」

と、本当に不思議そうにその天人が言う。

「おまつ …… これだけって、これで充分だろ！？」

と、銀時はかなり驚いた表情になる。

「な、何杯ならいいの…？」

と、恐る恐る新八が聞いてみると…

「うーん …… 二千？」

全員が驚愕する。大食いを誇る神楽でさえも、驚いていた。

「に、二千杯も食べて大丈夫アルか!？」

「うるせーよ。お前もすでに大丈夫なのか!?!の領域なんだよ。」

「でも二千杯って……!冗談…だよね…?」

と、新八が尋ねるが、

「いや?冗談じゃ無いけど?」

と、返される。すると、新八が耳打ちで銀時に、

「やばいです銀さん。これ本^{マシ}気です。」

「オイオイオイ!嘘だろ!?!モノホン来ちゃったじゃねえかオイ!
!二千杯ってどういう事だよ?例えるなら昆布五千枚だぞオイ!!」

「銀さん。全然例えが分かりやすくありません。」

「どういう胃袋してんだよアイツ!もう人間技じゃねえよそんなん。」

「銀さん。あの子人間じゃありません。」

「どうする……ん?」

銀時は、ふと天人がいる方向を見ると……

「二千杯はさすがに無理だけど、これぐらいならあるネ!」

「まあ、とりあえずこれでいっか…」

神楽が炊飯器ごとあげてた。

「オイイイイイ!!!!なんでオメーは勝手に炊飯器ごとあげてんのオオオオ!?」

全力で突っ込む銀時。そして……

「いっただっきまゝす!!」

と、言うところ……その天人の大きな口に、大量のご飯は一気に吸い込まれた……

「……………」

口をあんぐりと開けてる銀時と新八。

「ごちそーさまー!! ありがと、とりあえず動けるぐらいにはなったよ。」

と、神楽に言う天人。

「……………」

銀時と新八は未だ固まっており、動けるようになるまでは時間が掛かったと言う……

「で？お前は、そのマルクとか言う奴を倒した後、ワープなんたらに乗ってる最中に、ブラックホールに飲み込まれ、いつの間にここに辿り着いたと？」

天人から話を聞いた銀時は、話をまとめる。

「うん。ちなみにワープスターね。」

天人は訂正する。

「……お前……頭おかしいんじゃないの？」

「えっ？」

天人は、頭に「？」マークを浮かべる。

「銀さん、この子記憶障害かもしれませんよ？」

「マジかオイ。」

「銀ちゃん。しばらく家に置いてあげるヨロシ。」

「は……?」

一瞬固まる銀時。

「そうですね。それがいいと思います。」

と言う新八。

「いやいやいやいやいやおかしい。絶対おかしい。こんな暴食ヤローを家に置いてみる? あっという間に潰れるぞ? お前ん家に置けばいいだろ。」

「え……いや、そんな事したら……」

新八は銀時に、耳打ちで自分の想像を伝える。

志村家に来る。

← なんらかのキツカケで、新八の姉が作る暗黒物質を食べる。

← この天人だったら、まさかの美味しい、もありえる。

← 調子に乗って、たくさん暗黒物質を作る姉。

← 周りの人間（銀時達を含む）に被害増殖。

「……………」

冷や汗をたらたらと流す銀時。

「……………しょうがねえ…か……………オイ、お前。」

「え？」

ずっとときよとん、としての天人に、銀時は声を掛ける。

「お前の万事屋滞在を許可する。ただし！！働かざる者食うべからずだ！！」

「アンタもほとんど働いて無いですけどね……………」

と、すかさず突っ込む新八。

「ここに滞在するからには、お前も万事屋メンバーとして働いて貰う！！いいな！？」

「……………よろずや？」

「まあいわゆる何でも屋だよ。」

新八がかなり簡単に説明する。

「ふーん……………いいよ？ここがどこなのかも分かんないし……………とりあえず。」

その天人は、承諾した。

「よし、話は決まったな。で？お前名前は？」

「僕はカービィだよ。」

と、カービィは答えた。

「なんか変な名前アルな。」

カービィは、カタカナなので、少し変に聞こえる。

「俺はこの万事屋のオーナーの坂田銀時だ。まあ銀さんでも銀ちゃんでも好きに呼んでくれ。」

「僕は志村新八。よろしくね、カービィ。」

「私は神楽アル！宜しくアル！！」

万事屋メンバーも、自己紹介をする。

「うん！宜しく！」

「はあ・・・食費が痛いぜ・・・」

と、最後に愚痴を漏らす銀時。と言う訳で、カービィも含めた万事屋メンバーの騒がしい生活が、これから始まる・・・

次回 「外見より中身が大事って言うけど結局最初に見てしまうの
は見た目」

第一訓 「お金に執着するとなんだかんだでろくな事にならない」 (後書き)

銀魂風のタイトル考えるのって疲れる・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3976v/>

星魂(ほしたま)

2011年10月8日22時06分発行